1）働く女性の母性保護に関する医学的背景

担当　日本大学医学部産科婦人科学教室
佐藤　和雄、正岡　直樹
東京都立広尾病院産婦人科
飯塚貞男

勤労婦人における医学上の問題点の有無を明らかにすべく、月経ならびに妊娠・分娩・産褥に関するアンケート項目の検討を行なった。

1.　月経（表1）

対象は有職婦人1052人：グループ1（G1）、無職婦人625人：グループ2（G2）であった。月経周期はG1で27.4±5.8（日）、G2で29.1±5.1、月経持続日数はG1で5.8±1.2（日）、G2で6.0±1.2であり、このうち月経量が“多量”すなわち過多月経であると答えた者はG1で150／1045（14.4％）、G2で65／623（10.4％）と有職婦人に高率であり、さらに月経困難症“あり”との回答もG1が305／1021（29.9％）、G2で118／614（19.2％）と有職婦人において有意に高率であった。一方、月経異常または不妊の治療歴の有無についてみると、“あり”との回答はG1で93／1043（8.9％）に対しG2は81／620（13.1％）であり無職婦人において受診率が高い傾向にあった。このことより有職婦人においては、月経に関する訴えを有しながらも仕事のため病院を受診しがたいという状況が推察された。

2. 妊娠・分娩・産褥

対象経産婦数は有職婦人群456人（G1）、無職婦人群（G2）625人であった。

A．妊娠診断から分娩までの妊婦健診受診回数（表2）

G1で12.9±5.1日、G2で13.7±3.8日とやや無職婦人の受診回数が多い傾向となったものの大きな差は認められなかった。

B．妊娠時の異常（表2、表3）

妊娠時に異常があったとした婦人はG1で231／456（50.6％）、G2で376／625（60.1％）と無職婦人に高率であったが、その内容についてみると両群とも貧血が最も頻度が高く、その他として重症妊娠悪阻、妊娠中毒症、切迫流早産、前期破水の項目が挙げられた。各群におけるそれらの発生率をみると貧血のみG1：99／456（21.7％）、G2：194／625（31.0％）と無職婦人群で高率であった以外は、重症妊娠悪阻G1：14.0％、G2：11.8％、妊娠中毒症G1：9.8％、G2：0.6％、切迫流産G1：2.8％、G2：0.05％、前期破水G1：9.2％、G2：0.6％となり有職婦人群においてこれらの妊娠時異常が有意に高率に発生している事ことが確認された。

また妊娠時の異常発生になんらかの誘因があったとするものは、有職婦人群では妊娠異常時をみた231人のうち65人（28.1％）であり、誘因の項目として挙げられたもののうち、“就労時”が13／65（20.0％）、“労働の過重”が29／65（44.6％）となり異常発生の一要因としての労働の関与が想定された。

C．分娩時の異常（表4）

分娩時の異常として吸引・鉗子分娩、帝王切開、微弱陣痛、胎児仮死、死産、異常出血などに関して検討した。吸引・鉗子分娩が有職婦人群のG1で36／456（7.9％）と無職婦人群であるG2の19／625（3.0％）に比較し高率であり、一方、帝王切開はG1が39／456（8.5％）、G2が89／625（14.2％）と無職婦人群で高率となっているが、その他の分娩時異常に関しては両群間に有意差は認められなかった。有職婦人群で吸引・鉗子分娩が高率であった背景には、分娩時間（分娩1・2期）がG1：10.0±6.3時間、G2：8.7±6.5時間と有職婦人群で長くなっていることも関連している可能性がある。また、分娩時異常の誘因に関しては両群間に有意差はなく、分娩時異常については今回の集計をみる限り、労働の影響は少ないものと考えられた。

D．産褥の異常（表5）

産褥の異常として乳腺炎、貧血、子宮復古不全につき集計をおこなった。子宮復古不全は有職婦人群、無職婦人群の両群に差は認められなかったが、乳腺炎の発生はG1で20／456（4.4％）、G2で7／625（0.1％）、貧血はG1が37／456（8.1％）、G2が82／625（1.3％）となり、明らかに有職婦人群において高率の発生をみた。

また“断乳のきっかけ”についての回答のあった有職婦人219人のうち104人（47.5％）が職場復帰を理由としており、さらに“授乳期間が長い”とした28人（12.8％）も背景に仕事を持ちながらの授乳活動の困難性を窺わせており、育児上大きな問題点であると同時に有職婦人群に乳腺炎の発生が高率である原因の一つであるとも考えられ

た。

表1

アンケート対象　有職婦人　1052人：G1
　　無職婦人　623人：G2

月経周期　G1　27.4 ± 5.8　G2　29.1 ± 5.1
月経持続日数　G1　5.8 ± 1.2　G2　6.0 ± 1.2

月経量（過多月経の有無）
“多量”と回答　G1　150 ／ 1045　14.4％
　　G2　65 ／ 623　10.4％

月経困難症の有無
“あり”と回答　G1　305 ／ 1021　29.9％
　　G2　118 ／ 614　19.2％

月経異常または不妊の治療歴の有無
“あり”と回答　G1　93 ／ 1043　8.9％
　　G　281 ／ 620　13.1％

表2

過去の妊娠・分娩・産褥に関する集計

経産婦数	G1	456	G2	625
妊娠診断から分娩までの外来受診回数	G1	12.9 ± 5.1	G2	13.7 ± 3.8

妊娠時の異常（+）

異常項目	G1 231／456 (50.6％)	G2 376／625 (60.1％)
強度のつわり	64／231 (27.7％)	74／376 (19.7％)
貧血	99／231 (42.9％)	194／376 (51.6％)
妊娠中毒症	45／231 (19.5％)	41／376 (10.9％)
流産	13／231 (5.6％)	3／376 (0.8％)
前期破水	42／231 (18.2％)	40／376 (10.6％)
早産	有意差なし	
強度のつわり	64／456 (14.0％)	74／625 (11.8％)
貧血	99／456 (21.7％)	194／625 (31.0％)
妊娠中毒症	45／456 (9.8％)	41／625 (0.6％)
流産	13／456 (2.8％)	3／625 (0.05％)
前期破水	42／456 (9.2％)	40／625 (0.6％)

表3

妊娠時の異常発生の誘引（+）

	G1 65／231（28.1％）	G2 85／376（22.6％）
就労時	13／65（20.0％）	4／83（4.8％）
労働の過重	29／65（44.6％）	10／83（12.0％）
精神的ストレス	有意差なし	
引っ越し	有意差なし	
事故	有意差なし	
その他	17／65（26.2％）	41／83（49.4％）

表4

分娩時の異常（+）

異常項目	G1	G2
吸引・鉗子分娩	36／456（7.9％）	19／625（3.0％）
帝王切開	39／456（8.5％）	89／625（14.1％）
微弱陣痛	有意差なし	
胎児仮死	有意差なし	
死産	有意差なし	
異常出血	有意差なし	
その他	有意差なし	

分娩時異常発生の誘引

就職時、労働の過重、精神的ストレス、引越し、事故の諸因子は両グループ間に有意差認めず。

分娩時間（Ⅰ・Ⅱ期）（時間）

G1　10.0 ± 6.3　　G2　8.7 ± 6.5

表5

産褥時の異常（+）

	G1	G2
乳腺炎	20／456（4.4％）	7／625（0.1％）
貧血	37／456（8.1％）	82／625（1.3％）
子宮復古不全	有意差なし	

断乳のきっかけ（+）

	G1（n：219）	G（n：101）
職場復帰	104／219（47.5％）	4／101（5.0％）
乳汁分泌不良	74／219（33.8％）	53／101（52.5％）
授乳期間が長い	28／219（12.8％）	24／101（23.8％）
その他	18／219（8.2％）	19／101（18.8％）

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

勤労婦人における医学上の問題点の有無を明らかにすべく、月経ならびに妊娠・分娩・産褥に関するアンケート項目の検討を行なった。